

一茶の写声語に関する考察(二)

小 嶋 孝 三 郎

目 次

- 一、まえおき
- 二、伊藤正雄氏の説
- 三、時代別考察
 - イ、寛政時代
 - ロ、享和時代
 - ハ、文化時代前期
 - （以上前稿「論究日本文学」第一〇号）
 - ニ、文化時代後期
 - ホ、文政時代
- 四、むすび

ニ、文化時代後期

文化時代後期は、一茶の全生涯において最も充実した創作活動の行なわれた時期と云われている。こゝには「七番日記」という前後九年間に亘る総句数七千百余を収めた大著がある。そしてその総決算ともみられるものが名著「おらが春」であった。従って、こうした点からも、私は別表（前稿）のように、この期の中に文政二年迄

を含めて説くことにしたのである。

既掲の通り、この期における一茶の写声語は、総句数八二八九句に対して七五九句、その使用度は比率にして九%強という高率である。これは既に見て来たように、享和時代、文化時代前期を通じて平均五%であったものが、この期に入って一躍八%となり、その後漸次増加の一途を辿り、文化十三・四年の一一%をピークとして以後やゝ下降している。しかし、これを次期の文政三年から七年までの五乃至七%に比すると、そこにどうしても明確な一線を劃さねばならないことになる。

さて所謂「一茶調」なるものが、写声語の上に果してどのように現われているであろうか。

がさく〜と、粽をかちる美人哉

（文化九年、七番日記、句稿消息「がさく〜と」）
この句における一茶的な把握を説明するために、次の三句を比較してみよう。

縁結ふ片手にはさむ額髪（芭蕉）

- 9、霜がれにとろ／＼とセイビ参り哉 () 〃 〃
 10、ざぶ／＼と白壁洗ふわか葉哉 () 〃 十五年、〃 〃
 11、蚊の声に馴てすや／＼寝る子哉 (文政二年、八番日記)
 12、白山の雪きら／＼と暑かな () 〃 〃 〃
 13、子宝がき／＼と笑ふ椿火哉 () 〃 〃、おらが春)
 1、は春日を浴びた桜の葉のみずみずしい緑の光沢。そよ風に揺れている感じ。2、は雪どけで洗い浄められたような月光。独特の描写。3、「行く春やほう／＼として蓬原」(子規)と好対照。
 4、「発句集」の「ほちや／＼」の方がよい。丸味・ふくらみ・やわらか味のある感じ。「雪にくるまる」という表現と見事に適合している。5、待望の朝晴れ。擬音が直截的で作者の気分まで感じさせる。6、は石路の花にたまつちんまりとした露の玉。7、擬音に馬小屋の気分が出ている。9、「ざぶ」 「ざぶり」 「ざんぶり」等 いずれも一茶の好んで用いたもの。大胆不敵な描写。

ろ、三音節反復型

- 1、雪とける／＼と鳩の鳴木かな (文化七年、七番日記)
 2、下駄からり／＼と夜永のやつら哉 (〃 十年、句稿消息)
 3、大盤ゆらり／＼と通りけり (文政二年、おらが春、八番日記「よろり／＼」)
 4、卯の花もほろり／＼や藁の塚 () 〃 〃、おらが春)
 5、一つ蚊のだまってしくり／＼かな () 〃 〃 〃
 6、三つ子さいかり／＼や年の豆 () 〃 〃、八番日記)
 1、は鳴き声の仮借法。2、は擬音を効かせている。「やつら」は椋鳥一茶の悪態癖。3、いかにも「大盤」らしい悠揚せまらぬ様

子がこの擬態語と結句に生かされている。6、は擬音に歯のない作者の切齒扼腕の情がこもっている。

また、次のような句は、型にはまった疊語に満足せず、擬音による写実を期している。

鳶ヒヨロヒヨロ神の御立げな

(文化十二年、七番日記、発句集「ひよろろ」)

今日は神無月朔日だ。鎮守の神様もそろそろ「御立げな」。鳶までがお見送りの笛を吹いとるぞ。蒼空に大きな孤を描きながら愁々と飛翔する鳶がその鳴き声だけで見事に描かれている。

むまさうな雪がふりはりふはり哉

(文化十年、七番日記)

にも単なる「ふはり／＼」を避けており、次代には四音節反復のうまさうな雪やふふはり／＼と (文政七年、随齋筆記) が見られ、更には

むまさうな雪がふうはり／＼と (文政十二年刊、一茶発句集)

へと推移した跡が見える。このように、一茶が一句の趣向を変更することなく、表現に苦心して、推敲に推敲を重ねたことは、その数多くの遺稿に徴して明白である。

2、音節交替型

これは疊語に最も近いものではあるが、形態的には疊語よりも複雑なものとなえよう。

わやくやと轂を侘る雀哉

(文化七年、七番日記)

乙鳥や里のばくちもへちやくちやと

(〃 九年、株番)

行としや何をいぢむぢ夕千鳥

(〃 十年、七番日記)

わやくやハ若い同土が飯鴈(文化十一年、七番日記、句稿消息)
のらくらも御代のけしきぞ更衣 (〃 十四年、七番日記)

ムチャクチャやははれことしも暮の鐘 (〃 十五年、〃)
蚊もちらりほらり是から老が世ぞ

(文政二年、八番日記、おらが春「蚊が」)
句として見るべきものは第一句ぐらいなもの。「わやくやと」は
骸にとまどい騒ぐ雀の群の描写。

3、促音型

〃、〃一音節・促音十と(サット型)

1、寝庭にさつと時雨の明り哉 (文化七年、七番日記)

2、人声にほつとしたやら夕桜 (〃 十一年、〃)

3、しなのぢやそばの白さもぞつとする (〃 十四年、〃)

これらの語そのものはさして珍らしくない。しかし、右の諸句の
用語は頗る適確である。俳句における写声語の効用をよく心得てい
る。1、は一語よく刹那の照明を与え、2、は夕桜の風情をよく擬
人化し、3、は作者の内面的な苦惱をよく表明し得ている。

また、この促音を覺語化したものに、

山霧のさつさと抜ける座敷哉 (文化十年、七番日記)

昼顔やぼつぽと燃る石ころへ (文政二年、おらが春)

などがある。浅間山やその麓を通る中仙道の往還は、一茶にとつ
ては最も通いなれたものであり、またそれだけにこのような情景も
よく掴み得たのであろう。

り、〃一音節・促音・一音節り延長(十と)(アッサリ型)

1、親竹のけつくり瘦せて立にけり (文化六年句日記)

2、あつさりと春は来にけり浅黄空

(文化九年、株番、十一年、七番日記)

3、陽炎にばつかり口を蛸哉 (文化九年、七番日記)

4、ぬつぽりと立や夜寒の大入道 (〃 十二年、〃)

5、さぼてんののつべり良くなる日哉 (十三年、〃)

6、湯上りの尻にべつたり菖蒲哉 (〃 〃、〃)

7、べつたりと人のなる木や宮角力 (〃 十四年、〃)

8、我やうにどつさり寝たよ菊の花 (文政二年、おらが春)

いずれも即興的な写生句である。これらの語そのものには一茶の
個性は見られぬ。2、は歳旦吟。二つの「さ」音の奏でる音感に軽
く明るく爽やかである。春を迎えて得意然たる一茶。3、干潮で大
きく口をあけたあさり貝。4、「次の間の灯で膳につく」孤独な旅
人一茶。5、6、7、即興。8、は主観的描写。

c、〃拗ノ促音十と(チョット型)

湖をちよつと遊しいなご哉 (文化十四年、七番日記)

芒からによつと出たる坊主哉 (〃 〃、〃)

その鋭い観察眼は、対象を間髪を入れず活写している。後者は
「入道によつとまいるいぬ納豆汁」(蕪村)と好対照。蕪村の用語
「よつと」はすぐれた実感描写ではあるが、それは「源氏」や「徒
然草」等に用例のあるレッキとした古典語、それにひきかえ一茶の
「によつと」は俗語。

4、撥音型

げろりくわんとして、雁と柳哉

(文化八年、七番日記、我春集「鴈と」、発句集「鴈と」)

花の月のとちんぶんかんのうき世哉 (文化八年、七番日記)

きりくしやんとしてさく桔梗哉 (〃〃〃〃)

じやく馬のつくねんとして霞む出 (〃〃九年、〃〃)

つるべ竿きよんとしてあるわか葉哉 (〃〃〃〃、句稿消息)

留守札のへげんとしてちる木葉 (〃〃十年、七番日記)

梟やのはん所かとしての暮 (〃〃〃〃、〃〃)

稲妻やうっかりひよんとした貌へ (〃〃十一年、〃〃)

草蔭につんとしてゐる蛙かな (〃〃〃〃、句稿消息)

路の葉にぼんと穴明く暑哉 (〃〃十二年、七番日記)

たのもしやてんつるてんの初裕 (〃〃十三年、〃〃)

女郎花あつげらこんと立りけり (〃〃〃〃、〃〃)

大寺や主なし火鉢くわんくと (文化十三年、七番日記)

この種の形態はいずれもその口調が流暢軽快であることは、こうして並べてみれば最もよく理解し得るであろう。所謂「一茶調」として人口に膾炙しているものが、右の「つんと」「ぼんと」「くわんくと」を除いた他の写生語によく現われている。正にこの辺りが一茶の独擅場であり、古今独歩の境地とも云えよう。「げろりくわん」はケロッとしているさま。無関心な状態。「きりくしやん」はキリリとひきしまつたような感じ。「あつげらこん」はポカ

ンと口を開けているさま。ところでこれらの語は一茶の新造語ではない。例えば「うっかりひよん」は芭蕉の初期宗房時代の作に「夕顔にみとるゝや身もうかりひよん」がある。又、川柳にも、

たれるうちごせ大道にあげらこん

(柳多留、十八篇、天明三年刊)

おいらんか名ウ代きりくしやんと寐る

(〃〃〃〃、二十四篇、寛政三年刊)

などがある。一茶の用語で川柳と共通するものは多いが、次にその主なものをあげておく。

入髪ていけしやあくくと中の丁(柳多留、初篇、明和二年刊)

寒念仏みりくくとあるくなり(〃〃〃〃、〃〃)

細見で見えてハベちやくちやしやべる也

太刀をぐわりと、なげ捨てかしわ餅 (〃〃〃〃、十二篇、安永六年刊)

へんな事始皇ちんぶんかんきらい (〃〃〃〃、十三篇、安永七年刊)

赤子のあしを多いやとたづね出し (〃〃〃〃、十八篇、天明三年刊)

化粧の間不時に明ルトもくぐわあ (〃〃〃〃、二十三篇、寛政元年刊)

注「もくぐわあ」はムササビの方言と云われているが、人を急に驚ろかす時の言葉として右のように用いられている。

「おらが春」に、

闇の蚊のぶんとはかりに焼れけり (文政二年)

というのがある。それを、

闇の蚊のはつ出の声を焼れけり (〃二年、八番日記)

と比較すると、やはり一茶の本領は写声語と共に発揮されていることがよく解る。

5、〔二音節〕リ延長十(と) (ふハリと型)

1、三日月やふハリと梅に鶯が (文化八年、七番日記)

2、山吹にぶらりと牛のふぐり哉 (〃九年、〃)

3、夕立やけろりと立し女郎花 (〃〃、株書)

4、凧上でゆるりとしたる小村哉 (〃〃〃、七番日記、句稿消息)

5、茶屋の灯のげそりと暑へりニけり (〃〃〃〃、七番日記、〃)

6、大根引拍子ニころり小僧かな (〃〃〃〃〃、七番日記、〃)

1、の「ふハリと」には動きがあり、「が」で言いさしたのも巧み。2、は対照の滑稽味。4、はいかにものんびりした村の正月風景。6、は川柳調。「ふハリと」「げそりと」を除けば、いずれも

〔二音節・ラ行音〕リ延長型。他にも「ほろり」「さらり」「ばらり」「によりり」等その用例は頗る多い。

6、観念語の象徴的用法

1、枯れんゝの野辺に恋する蝨哉 (文化七年、七番日記)

2、花げしのふはつくやうな前齒哉 (〃〃九年、〃)

3、づうくし蟹上の蛙哉 (〃〃〃〃、〃)

1、「かれがれ」は「離れんゝ」の義にかけて中古から使われている。つるむ蝨を「恋する」といったのも面白い。2、3、は俗語の動詞や形容詞の語感を効果的に使っている。

7、漢語の俗語化

1、いうぜんとして山を見る蛙哉 (文化十年、七番日記、句稿消息)

息、浅黄空、しだら、おらが春「ゆうぜんとして」

2、大凧のりんとしてある日暮哉 (〃〃十一年、七番日記)

3、下戸村やしんかんとして梅の花 (〃〃〃〃、七番日記、句稿消息)

4、リンくゝと凧上りけり青田原 (〃〃〃〃〃、七番日記)

1、「悠然として南山を見る」詩仙ならぬ蛙。2、3、4、は寒村小景。「凜と」「森閑と」というように表記しないところに一茶的なセンスがある。たまたま漢字を使ったものでは次のような滑稽調である。

溪の梅忽然と咲き給ひけり (文化十一年、七番日記)

その他古語にしても 例えば由緒正しい歌語「ほのぼの」を次のように用いている。

蚊声やほのぼの明し浅間山 (文化六年旬日記)

ほのぼゝとして、乞食の小菜も咲きにけり (〃〃九年、七番日記)

ほのくくと明石の浦の海鼠哉

(〃 十一年、七番日記)

六年の作は至極真面目な句で未だ一茶調とは云えないが、後の二作で漸次一茶調は深まっている。

以上で第一の点についての考察を一応終えることにして、第二の点即ち一茶の作風との関連について検討してみよう。

1、作者の主観又は感情を強く反映しているもの

雪とけるくくと鳩の鳴木かな

(文化 七年、七番日記)

雁鴨のツウくしきよ門柳

(〃 八年、〃)

乙鳥や里のぼくちをべちやくちやと

(〃 九年、株 番)

留守札のへげなんとしてちる木葉

(〃 十年、七番日記)

朝晴にばちくゝ炭のきげん哉

(〃 〃、七番日記、句稿消息)

梟やのほゝん所かとしの暮

(〃 〃、七番日記、句稿消息「梟よ」)

卅日銭がらつく笹の夜寒哉

(文化十三年、七番日記)

しなのぢやそばの白さもぞつとする

(〃 十四年、〃)

我やうにとゞさり寝たよ菊の花

(文政二年、おらが春)

2、人間臭を帯びたもの

夕立やけろりと立し女郎花

(文化 九年、株 番)

ちよんぱりと不二の小脇の柳かな

(〃 十一年、七番日記)

まめな尻ついと並る乙鳥哉

(〃 〃、〃)

人声にはつとしたやら夕桜

(〃 〃、〃)

草蔭につんとしてゐる蛙かな

(〃 〃、句稿消息)

此てもシヤアくとして、蛙かな

(〃 〃、おらが春)

きよろくキヨロく何をミそささい

(〃 十四年、〃)

一つ蚊のだまってしくりくかな

(文政二年、おらが春)

3、動物活写

白露にざぶとふミ込鳥哉

(文化 八年、七番日記)

三日月やふハりと梅に鶯が

(〃 〃、我 春集)

山吹にふらりと牛のふぐり哉

(〃 九年、七番日記)

寝た犬にふはとかぶさる一葉哉

(〃 十一年、〃)

さをしかの尻にべったり紅葉哉

(〃 十二年、〃)

猫の子のちよいと押へるおち葉哉

(〃 〃、〃)

牛モウくくと霧から出たりけり

(〃 十三年、〃)

ついくゝとから身でさハぐ蜻蛉哉

(〃 〃、〃)

湖をちよつと遊しいなご哉

(〃 十四年、〃)

行灯にちよいと鳴けり蚕

(〃 十五年、〃)

大蝨ゆらりくゝと通りけり

(文政二年、おらが春、「よろりく」と)

「ふわり」「ふはと」「ちよつと」等は一茶の最も好んだ用語と云える。他にも用例が多い。こうした刹那の直写は、一茶の観察眼の鋭さとも云えるが、芭蕉や蕪村の場合のような、所謂「ぬきさしならぬ用語」ではなくて、実感描写の素直さというか、実感語的確さとも云うべきものであろう。一茶の句が単なる趣味的感興な

どではなしに、どこまでも生活の実感から来ていることは、これらの句が充分証明してくれる。よそゆきでなしにありのまゝの平明さがその骨頂とも云えよう。

4、一句に二種の写声語を用いたもの

- 里しんとして、つんつと風上りけり (文化八年、七番日記)
そとすればぐわらりと炭のくだけけり (〃十年、〃)
むくく〜とだまつてばかりばつた哉 (〃十二年、〃)
笛ビイ〜杖もかち〜冬の月 (〃十三年、〃)
がら〜やビイ〜うりや梅の花 (〃十四年、〃)
石川はくはらり稲妻さらり哉 (文政二年、おらが春)
むら千鳥そつと申せばばつと立 (文政二年、八番日記)

〔文政二年、八番日記「そつと申せばくつと立千鳥哉」〕

4、秀れた叙景句

- 雪とけてくり〜したる月夜哉 (文化七年、七番日記)
山霧のさつさと抜ける座敷哉 (〃十年、〃)
大寺や主なし火鉢くわん〜と (〃十三年、〃)
ざぶ〜と白壁洗ふわか葉哉 (〃十五年、〃)
かすむ日やしんかんとして、大座敷 (文政二年、おらが春、八番日記)

- 白山の雪きら〜と暑かな (文政二年、八番日記)
稲妻にへな〜橋を通りけり (〃〃〃〃)
屋頭やばつぽと燃る石ころへ (〃〃〃〃)

以上は、用語の多様性という点からみても全く前代の比ではない。川島つゆ氏は、この期の一茶を評して、「一茶は苦渋に満ちた生活派俳人から転じて、軽妙な句作り人となつたのである。」

(前掲「蕪村・一茶」三八八頁)

と云われているが、正に一茶は自らの天性をこれらの写声語を通じてはじめて発見することが出来たのではないかとさえ思われるのである。

ひよろ〜とけて露けし女郎花(芭蕉)

の句が「随斎筆記」にもわざわざ銘記されているが、一茶はそれを敢えて、

女郎花あつげらこんと立けり

(文化十三年、七番日記、発句集「あつげらかん」)

と表現した。これはいかにも飾り気のない極めて無造作な把握であつて、一茶の面目が躍如としている。彼は芭蕉を崇仰し、常に絶対視した口吻を漏らしてはいるが、その作句における傾向は全く相反したものであつた。

金屏のかくやくとして、ぼたんかな(蕪村)

その絢爛豪華を誇る素材、金屏と牡丹との色彩美、しかもそれを「かくやくとして」光り輝く鮮烈な印象として把握する写生の妙技は、正に蕪村ならではの感がある。かゝる絶妙の均整美は伝統的な風雅観の到達すべき一つの極点を示している。しかし、今その焦点を写声語にしはるとき、「かくやく」は「赫奕」^{エキ}の誤読による漢語の擬態語化。それは右のように仮名書きであっても決して俗語のセンスでは

ない。その云わば高踏的なきらいのある用語に較べると、一茶の「がさく」や「あつらこん」には、彼の個性なり生活なりが強く反映している。そのエネルギーシユな体臭やその庶民的な感慨を直に感じさせるものをもっている。しかもその用語こそ、彼があくまで民衆の生活に根ざした表現者の態度を忘れなかったものであり、取り澄ました閑者流の風雅ぶりに敢然として反逆を企てたものに外ならなかった。

以上、要するにこの期は「七番日記」から「おらが春」に到達するまでの、云わば一茶の生涯における最も結実した時代であった。その前半は中央俳壇における特異な存在として、また後半は江戸帰りの宗匠として、まさに郷党の与望を一身にあつめていたのである、待望の帰郷、結婚、更に地方俳壇の第一人者として、一茶の五十代は全くゴールデン・エッジというにふさわしかったのである。

かくして一茶の庶民的な感覚—というよりも農民的な感覚が、単なる趣味的な感興としてではなしに、生活的な感動として、思う存分表現された。その自我の逞ましき、凶太き、生々しい野性味は、荒けずりのタツチで手当り次第に作句された。それは一面彼の生活の排泄物にも似ていた。しかし、このことをもう少し考えてみると、それまで彼が江戸において自制し抑制し続けて来た彼本来の農民感情が、この時一度にどつと堰を切つて溢れ出し、大きな奔流となつて流れている観がある。このようにして、彼の作品が伝統的な風雅観の中にあつた貴族趣味と明確な一線を劃し、且つ又一方では民衆の手垢で汚れていた俗語になまなましい生命を賦与する結果ともなつたのである。

ホ、文政時代

文化十一年五十二才の一茶は、自分より二十四才も年下の女きくと最初の結婚をした。既にその前年、宿願の遺産分配問題も解決しているし、嘗て彼が「寄るもさはるも次の花」と詠み、「古郷人のぶあしらひ」と嘆いた郷党の空気が今や一変している。というのは、彼は当時既に北信一帯を有力な地盤として、代官、庄屋はもとより地主、酒造家、油問屋、旅館主といった門人兼パトロンを擁して、押しも押されぬ江戸帰りの宗匠であった。従つて、それまで彼を憎悪し、敵視し、排斥していた人達も、いつか次第に彼を見直しはじめ、やがては逆に彼を畏敬の眼をもつて見るようになりつゝあつた。また、一茶が文政三年以降幾つかの頼母子講にも掛金を払つていたらしい自筆の手控えも発見されており、その頃彼の生活はかなり余裕を生じていたことが解る。しかし、この頃から一茶の生活は次第にだれて来ている。凡そ文政二年を頂点として、彼の作品はそれまでのような特異さや逞ましさが殆ど見られなくなつて来ているのである。

このことは写声語を通じてみても、おのずから明白である。先ずその使用度についてみると、同じ「八番日記」の中で、文政二年と同三年とを比較してみても、前者の総句数九一四句中写声語を用いたものは八六句、九%強に対して、後者では八一八句中四三句、五%強で、ほぼ半減している。しかもこの激減は決して一時的なものではなく、文政三年以降同七年までの%は、五・七・五・六・七%といずれも七%を上まわつていない。ただ八・九年に至つて再び一〇

%台に回復しているのである。この八・九年の上昇は、云わば掉尾の一振ともみられるが、後述する通り内容的には全く写声語マンネリズムに陥っているものである。

以下この時代の一茶の写声語を検討してみよう。但し細部に亘つて網羅することを避けて、その特徴的なものだけをあげる。

- 1、ふくく〜と乗らばぼたんの臺哉 (文政三年、八番日記)
 - 2、門先にちよいとうづまく木の葉哉 (〃〃〃)
 - 3、とちく〜と角兵衛師子もぼたん哉 (〃〃〃)
 - 4、馬の背の螢ばつばと掃れけり (〃〃〃)
 - 5、つり鐘の中よりわんと出る蚊哉 (〃〃〃)
 - 6、雪ちらり〜見事な月夜哉 (〃〃〃)
 - 7、宵過や柱みり〜寒が入る (〃〃〃)
 - 8、埋火や白湯もちん〜夜の雨 (〃〃〃)
 - 9、本馬のしやん〜渡る水哉 (〃〃〃)
 - 10、寝た下を尻づうん〜哉 (〃〃〃)
 - 11、じつとして、馬にかぐる蛙哉 (文政八年 句帖)
- 「おらが春」が名実ともに一茶の円熟した境地を示していたのに対して、この期における所謂「一茶調」の佳句は目だつて減少している。但し、蚊、蠅、蚤、虱、やせ蛙、雀の子等々を詠んだ写生句や家庭の悲哀を素材とする人生詩で人口に膾炙する佳句を残していることをみれば、この期は所謂「一茶調」の爛熟期でもあった。ところで、写声語を用いた句となると、僅かに右の5、11、あたりにその片鱗が見られるに過ぎない。1、は主観的把握。「てもさても福相のぼたん哉」(文政七年)3、「とちく〜」は鼓の音。4、5、は

川柳調。「御かごからわんといわれるつばなうり」(柳多留、二十四篇、寛政三年刊)6、前代の「雪とけてくり〜したる、月夜哉」に及ばない。「見事な」は安易。7、以下10までいずれも表現のマンネリズムが目立っている。そして、既に「おらが春」にも一部見られたような「蚊がちりりはらり是から老が世ぞ」といったような半ば諦観的な老いの繰り言やものぐさ的な態度が目立って来ている。

日が長い〜とのらりくらり哉 (文政三年、八番日記)
うん〜と坂を上りて扇かな (〃〃〃)

はつ雪やつふりと湯に入てから (〃〃〃)

さてこの期の写声語に見られる特色は、前代と較べていさゝか異なる傾向が現われている。先ず第一に疊語のマンネリズムとその繰り返しが目立っていること、第二に音節交替型のものが多いこと、第三には定型と違った云わば変型疊語が多いことがあげられる。

先ず第一の点では、

ひっそひそひそひそすがれ螢哉 (文政六年、九番日記)
風ひやり〜からだのノリ哉 (〃〃〃)

庭先の木兎まじり〜かな (〃〃〃)

猪牙舟もつい〜ぞ時鳥 (文政八年、句帖)
蚤ひよい〜達者じまん哉 (〃〃〃)

など枚挙に遑がない。

第二の音節交替型についてみると、

日が長い〜とのらりくらり哉 (文政三年、八番日記)

引んぬいた大根で道を教へられ

(柳多留、初篇、明和二年刊)

大根引大根で道を教へけり

(文化十一年、七番日記)

やうらうの滝迄下タニくなり (柳多留十四篇、安永八年刊)

花陰も笠脱げ下にく、鼓

(文政五年、九番日記)

尤も、俳句における変型層語は既に元禄に惟然が先鞭をつけている。

水さつと鳥はふわくふわわく

(惟然坊句集)

水鳥やむかふの岸へつうい

()

「茶も「惟然坊に擬す」として「むまさうな雪」の句を作っていることでもあるから、一がい川柳の影響とも云えない。

以上要するに、文政期の「茶」はその持ち前の現実主義もにぶり、どちらかという自然や小動物等を対象とする即興句にやゝ見るべきものを残している。しかし、写声語の表現に関してみるときは、その殆どが前代から少しも発展していない。云わば形骸化した語の使用に甘んじているか、さもなければ「そのなまな口誦性」を弄んでいる。そこには前代までに見られたような野性的な感覚や、意欲的な独自の境地も殆ど見当らず。たゞ徒らに無造作な濫作に陥っている感がある。

四、むすび

嘗て「茶」の個性は、「不遇の野人」として、「磨いても磨き切れぬ璞」として、その特異さをもてはやされてきた。しかし、今日ではその農民性―特に封建社会における、被圧階級としての農民、云わば、「時代の継つ、児」としての農民階級の複雑な性格―にその焦点がしぼられて来ている。従って、それは単に「茶」の個性というよりも、近世末期の混迷した封建社会の下で生きて来た「茶」の中に、当時の農民の階級的な複雑さがそのまゝ反映しているものとみるべきであろう。

さてそうした意味における「茶」の個性的なものが、作品の上で果してどのような形をとっているか、その俳句表現に如何なる特色を発揮し得たか、それが写声語を通じてどのように現われているか、世に謂う「「茶調」と写声語との関係如何。そうしたことが小論の目標であつた。

ところで「茶」研究の泰斗伊藤正雄氏は、その点について「彼が擬声語・擬態語や覺語覺句を好んで使用したことは、確かにその作品に児童性を反映したものと云ふべきである」とされた。擬声語を言語の原始的なものとし、児童語や未開語と結びつけて考えるとき、「茶」の個性としての児童性とそれが容易に結びつく。しかし、こゝに改めて「茶」の作品を時代別に考察するとき、その作風が時代とともに成長発展し、彼の個性的なものが写声語を通じて大きく消長変遷していることを知るのであつて、これを單純に児童性の反映と断ずることにはやはり大きな疑問を感ぜずにはいられないのである。

今こゝで私の調査をもう一度整理してみると次のようになる。

時代別	一茶調の変遷	写声語の消長	俗語使用の態度
寛政時代	揺籃期	雌伏期	抑制的(雅語尊重)
享和時代	萌芽期	習作期	消極的使用
文化前期	開花期	成長期	積極的使用
文化後期	結実期	成熟期	自在に駆使
文政(三年以降)	爛熟期	停滞期	安易・濫用・耽溺

右によっても明白なように、一茶の写声語はその俗語使用の態度とともに生長しており、所謂「一茶調」の消長とは平行しているのである。

今俳諧史の中で、貴族的中世的伝統とそれに対立する人民的伝統とを対置してみると、俳諧の誠を「俗語を正す」ことよって出発した芭蕉は明らかに後者から出発している。しかし、本来武家出身の芭蕉は談林から出発したとはいへながら遂には「夏爐冬扇」(柴門の辭)の嘆を吐き「衆にさかひて」孤高の境地に自己を徹した。又中興蕪村は「俗語を用ひて俗を離るるを尚ぶ」(「春泥句集序」)ことを宣明しながら遂には唯美ロマンの高踏的境地に超然として遊んだ。ところで、一茶の場合はどうであらうか。

狂言「附子」の主人公太郎冠者は、頼うだ人がいつわっていたぶすが外ならぬ黒砂糖だったことを知って驚喜する。一茶も最初写声

語が自己の個性を生かすものであることを知らなかった。しかし、一旦その事を悟った時、彼は飽きることを知らぬほどそれにしやぶりついている。既に見て来たように、文化後期の一茶がそれまで矯めに矯めて来た自らの本性を、この時になって存分にぶちまけているのを見る。しかも、それが所謂「一茶調」の完成ともなった。だとすれば、その際、さながら壺を切つて溢れるように夥しい写声語を頻用している事実こそ、一茶が自己の本性と写声語とが密着していることに気づき、自らを発揮する強力な手段として、又最善の方法としてそれを選んだのだと思われる。一茶は写声語によつてはじめて自らの本性を発見しようなものである。そしてそのことは、一茶が自ら進むべき正しい道——人民的な伝統——を決してあやまらなかつたと云えよう。

近世末期の俳壇が滔々として通俗化の潮流におし流され、所謂「遊びの文学」でしかなかった時、一茶の「おらが文学」と雖も決してその一面を否定し切れないであろう。しかし、「おらが文学」の「おらが性」とも云うべき農民的な体臭は、俗語の駆使なくして決して發揮されなかつたであらう。

俳句における貴族的中世的な伝統に対立する人民的な伝統——もしそうしたものを考えるとすれば、それはやはり現実的、生活的なものを高々と掲げた一茶をその嚆矢としなければならぬのではない。写声語を通じてみるその個性的なもの、やはりそうしたものが強く反映している庶民的な体臭ともいふべきものにあるように思われる。そしてまたその辺に、一茶が單に農民層を代表するばかりでなく、広く幼童をも含めた大衆の層に浸透し歓迎される所以である

う。

付記 写声語（擬声語・擬態語・象徴語の総称）という名称は必ずしも適當ではないが、今は仮りにそうしておく。

（一九六〇・一二・二〇脱稿）